

平成 30 年 2 月 28 日

箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス 中央図書館前北地点

記者発表資料

九州大学埋蔵文化財調査室

3 月 1 日 (木) 13:30 ~ 14:30 に現地説明会を実施します。

1. 調査の経緯

九州大学では、統合移転推進事業にともない、箱崎キャンパスの埋蔵文化財調査を進めています。箱崎キャンパスは、延喜 21 (921) 年の^{はこぎきぐう}箱崎宮創建以降に形成された都市・集落である箱崎遺跡の一部です。これまでの調査により、古代末から近世にかけての遺構や遺物が確認されています。また、キャンパスの北側に接する J R 鹿児島本線の東側には、蒙古襲来に際して築かれた、国指定史跡^{げんこうぼうらい}元寇防塁 (地蔵松原地区^{じぞうまつばら}) があります。この延長線上に位置する箱崎キャンパス内を南北に貫くかたちで元寇防塁が築かれていたと推測されてきました (中山 1913a)。

これまでに本学埋蔵文化財調査室が実施した発掘調査では、箱崎キャンパス内から中世の石積み遺構が複数地点で見つかりました。その位置関係、立地環境、構築された時期と方法、出土遺物の特徴などを総合的に調査・分析した結果、これらの遺構は元寇防塁である可能性がきわめて高いと考えています (福田・森編 2018)。なかでも、平成 28 年度に行った中央図書館前南地点 (HZK1603・HZK1604 地点) では、後世に破壊され欠損する部分が含まれるものの、南北方向約 35 m (連続する部分で最大約 14 m) にのびる石積み遺構が確認されました。西側 (博多湾側) に石の面をそろえて並んでおり、もっとも良好に保存されていた部分では、石材が 3 段積まれた状態で高さ約 0.9 m 残っていました。

2. 箱崎地区の元寇防塁について

元寇防塁は、文永 11 (1274) 年の蒙古襲来 (文永の役) の後、^{けんじ}建治 2 (1276) 年頃から、鎌倉幕府の命により、九州各国の分担で博多湾沿岸一帯に総延長約 20 km にわたって築造されました【図 1・2】。「元寇防塁」の呼称は大正 2 (1913) 年の防塁調査の折、中山平次郎氏 (九州大学医学部名誉教授) によって命名されたもので、当時は「石築地」「要害石築地」とも表現されました。

元寇防塁は、今津地区は大隅・日向国、^{ながたれ}長垂地区は豊前国、^{いきのまつばら}生の松原地区は肥後国、^{めいのはま}姪浜地区は肥前国、博多地区は筑前・筑後国、箱崎地区は薩摩国、^{かしい}香椎地区は豊後国が、領主の所領に応じて割り当てられた範囲で築造を分担しました。昭和 6 (1931) 年 3 月 30 日、今津、今山、

長垂、生の松原、向浜、脇^{ももち}、百道、西新^{じぎょう}、地行、地蔵松原の10地区が国史跡に指定され、昭和56（1981）年3月16日に今津地区の一部が追加指定されました。

箱崎地区は石堂川（御笠川）と多々良川の河口を結ぶ約3.3kmの範囲にあたり、薩摩国による築造分担です。元寇防塁の位置については、中山氏が九州大学医学部構内（グラウンド横）から箱崎網屋^{あみや}の墓地、九州大学旧工学部、農学部構内を貫いて地蔵松原墓地にいたる微高地上に立地すると推測しました（中山1913a・b）。なお、箱崎地区は、正安4（1302）年頃まで、異国警固のために修理されていたと考えられています（佐伯2018）。

国指定史跡元寇防塁（地蔵松原地区）では、大正9（1920）年に全長4間半（約8m）の範囲を武谷水城氏が発掘しています。石列高は2尺～3尺5寸（約60～110cm）、石列幅は2尺～2尺4寸（約60～70cm）、石材は大きいもので幅2尺8寸（約85cm）、高さ1尺（約30cm）、厚さ1尺5寸（約45cm）と報告されています（武谷1922）。平成5（1993）年には九州大学農学部演習農場、平成12（2000）年にはJR鹿児島本線軌道下で、福岡市教育委員会が発掘調査を行っており、ともに元寇防塁の一部とみられる石材が散布する状況が確認されています。

3. 今回の発掘調査成果

(1) 調査概要

所在地 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学箱崎キャンパス
中央図書館前北地点（遺跡略号：HZK1706 地点）【図3・4】
調査期間 平成30年1月29日～3月16日（予定）
調査面積 計約100㎡

(2) 石積み遺構

今回の調査では、中央図書館前南地点（HZK1603・HZK1604 地点）で発見された石積み遺構から北に約50mの地点において、その続きが新たにみつけられました。発見された位置は、本調査地点の北東に位置する元寇防塁（地蔵松原地区）と、南西の中央図書館前南地点で検出された石積み遺構を緩やかなカーブで結んだちょうど線上にあたります。

もっとも浅い場所では地表下約50cmから石片が出土しています。中央図書館やそれ以前の旧農学部動植物学科教室の建設・基礎工事などによる破壊を大きく受け、石材が抜き取られている部分も含まれています。しかし、石積み遺構の最下段の部分（基底石）とみられる大型の石材が少なくとも5つ並んでおり、南北方向6.5m以上にわたります。石材は、礫岩・砂岩が用いられ、これまでの調査で出土した石積み遺構のものと同質です。大きさはバラツキがありますが、もっとも大きなものは幅・高さともに約80cmで、箱崎キャンパス内でみつけたもののなかでは最大です【図5】。

(3) 石積み遺構の立地と構造

旧理学部中庭地点（HZK1701 地点）では、石積み遺構がかつて存在した、博多湾に沿って南北方向に走る砂州上の浜堤（海岸砂丘）上に築造され、その目前20～30m先には汀線がせまっていたことがわかりました。また、後述するように、旧工学部2号館地点（HZK1702 地点）や旧工学部2号館前南地点（HZK1704 地点）では、石積み遺構から東側（陸側）に約5m離れた、

浜堤背部（鞍部）にあたる付近で、石積み遺構に並行して南北にのびる溝状遺構が発見されました。そのなかには遺物を含む黒褐色土（遺物包含層）が堆積していました。

本調査地点のB区でも石積み遺構の東側に溝状の窪みが存在する可能性が高いことがわかりつつあります。ただし、現時点で遺物包含層は確認できていません。また、現在、土層の堆積状況を調査中ですが、ほかの地点と同様に、石積み遺構が浜堤の頂部付近に立地する可能性が高いとみられます【図5】。

(4) まとめ

- ① 平成28年度に中央図書館前南地点(HZK1603・1604地点)で発見された石積み遺構の続きが、本調査地点で確認されました。これは国指定史跡元寇防塁（地蔵松原地区）の延長線上にあり、博多湾に面して連続的に築かれた、箱崎地区の元寇防塁の一部である可能性が高いといえます。
- ② 本調査地点の石積み遺構が、ほかの地点と同様、博多湾に沿って南北方向に走る砂州に形成された浜堤の上に造られており、背部には溝状遺構が存在します。

4. これまでの調査成果

本学埋蔵文化財調査室は、中央図書館前南地点〔1次〕(HZK1603地点)、旧理学部中庭地点(HZK1701地点)で、元寇防塁の一部とみられる石積み遺構を発見し、その成果を発表しました。それ以外の調査地点でも元寇防塁に関連する可能性の高い遺構が次々とみつかっています。ここでは、その調査成果の概要を報告します。

(1) 中央図書館前南地点〔2次〕(HZK1604地点)

非常に残りのよい石積み遺構が発見された、中央図書館前南地点〔1次〕(HZK1603地点)のすぐ北側に隣接する地点で調査を実施し、石積み遺構の延長を確認しました。途中、後世の破壊を受けた部分が含まれるものの、中央図書館前南地点〔1次〕とあわせて、発見された石積み遺構の全長は35m以上になります。また、背面の盛土や基礎構造（整地面）も確認されました【図6】。

(2) 旧工学部2号館地点(HZK1702地点)

A区で幅13m以上の溝状遺構が発見されました。溝状遺構には遺物包含層が確認され、これらの遺物の時期は14・15世紀頃のものと考えられます。また、溝状遺構の西側（海側）に隣接する旧工学部校舎基礎から、ほかの地点の石積み遺構と同様の石材・サイズの石片が複数出土しました。これらの石片は原位置をとどめていないものの、その近辺に石積み遺構が存在したことを傍証します。

B区の南東部では、中世の遺物包含層が確認されました。遺物は14世紀以降の日用品が主体となります。C区では、帝国大学期の攪乱坑からの発見ではあるものの、中世に位置づけられる可能性が高い碇石2点が出土しています【図7】。

(3) 旧工学部2号館前南地点 (HZK1704 地点)

幅約 15 m の溝状遺構が発見されました。溝状遺構には遺物包含層が確認されるとともに、その下層には、12・13 世紀頃と考えられる遺物を含む土坑群がみつかっています【図 8】。

(4) 農学部2号館前南地点 (HZK1705 地点)

石片散布が確認されました。これまでの調査成果と対比した結果、石片の石材、サイズ、散布状況、浜堤の頂部付近に位置する点、防塁推定線上に位置する点などから、石積み遺構にもなう可能性が高いことがわかりました。

また、石片散布の背部(鞍部)で、溝状の窪みを検出しました。ただし、そのなかに遺物包含層は確認されませんでした【図 9】。

5. まとめ—発掘調査成果の意義—

これまでの発掘調査成果をもとに、出土遺物や遺構の分析を進めてきたところ、箱崎キャンパスで次々とみついている石積み遺構は、かつて存在した箱崎の砂州上の浜堤(海岸砂丘)上に築造され、その目前 20～30m 先には汀線がせまっていたことがわかりました。また、溝状遺構は石積み遺構と一連のものであると考えられます。具体的な位置も広い範囲で特定されつつあります。これは、大正時代に中山平次郎本学医学部教授が主張した、箱崎キャンパス内を南北に貫く元寇防塁の推定ラインとほぼ一致します。

このように構造や立地環境の保存状態が良好で、広範囲にわたりその位置が判明している元寇防塁はきわめて稀であり、本遺跡は日本の歴史を知る上で非常に重要なものといえます。

文 献

- 井上蘭子 2008 「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)『中世都市・博多を掘る』海鳥社、48-51 頁
- 榎本義嗣 2008 「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)『中世都市・博多を掘る』海鳥社、52-55 頁
- 大塚紀宜 2013 「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について」『新修 福岡市史一特別編』自然と遺跡からみた福岡の歴史、福岡市、302-317 頁
- 佐伯弘次 2018 「箱崎の元寇防塁と薩摩」福田正宏・森貴教(編)『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1 箱崎遺跡—HZK1601・1602・1604 地点—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 武谷水城 1921 「多々良以東元寇防塁有無に就て 附香椎発掘の石塁」『筑紫史談』第 24 集、筑紫史談会、32-41 頁
- 武谷水城 1922 「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地藏松原発掘の石塁」『筑紫史談』第 25 集、筑紫史談会、33-36 頁
- 中山平次郎 1913a 「筥崎の石塁」福岡日日新聞 6 月 12～14・16・18～20 日掲載(中山平次郎 1984 「箱崎の石塁」『古代の博多』九州大学出版会、213-236 頁 所収)
- 中山平次郎 1913b 『福岡附近の史蹟』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 福岡市教育委員会埋蔵文化財課(編) 2002 「0035 元寇防塁跡第 9 次調査 (GKB-9)」『福岡市埋蔵文化財年報 VOL. 15 平成 12 (2000) 年度版』福岡市教育委員会埋蔵文化財課、52-54 頁
- 福田正宏・森貴教(編) 2018 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1 箱崎遺跡—HZK1601・1602・1604 地点—』九州大学埋蔵文化財調査室

堀本一繁 2010 「蒙古襲来と博多—元寇防塁の築造と異国警固体制—」 高橋慎一郎（編）『史跡で読む日本の歴史 6 鎌倉の世界』吉川弘文館, 186-211 頁

山内豊聡・巻内勝彦 1972 「元寇防塁構造の土木工学的考察」『九州大学工学集報』第 45 巻 九州大学工学部, 363-369 頁

柳田純孝 1988 「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二（編）『よみがえる中世 1』東アジアの国際都市博多, 平凡社



図1 博多湾一帯の蒙古襲来関連地（堀本 2010 を一部改変）



図2 『蒙古襲来絵詞』絵7に描かれた生の松原の石築地（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）



図3 箱崎遺跡とその周辺（国土地理院2008『1/25,000地形図 福岡』を引用・改変）

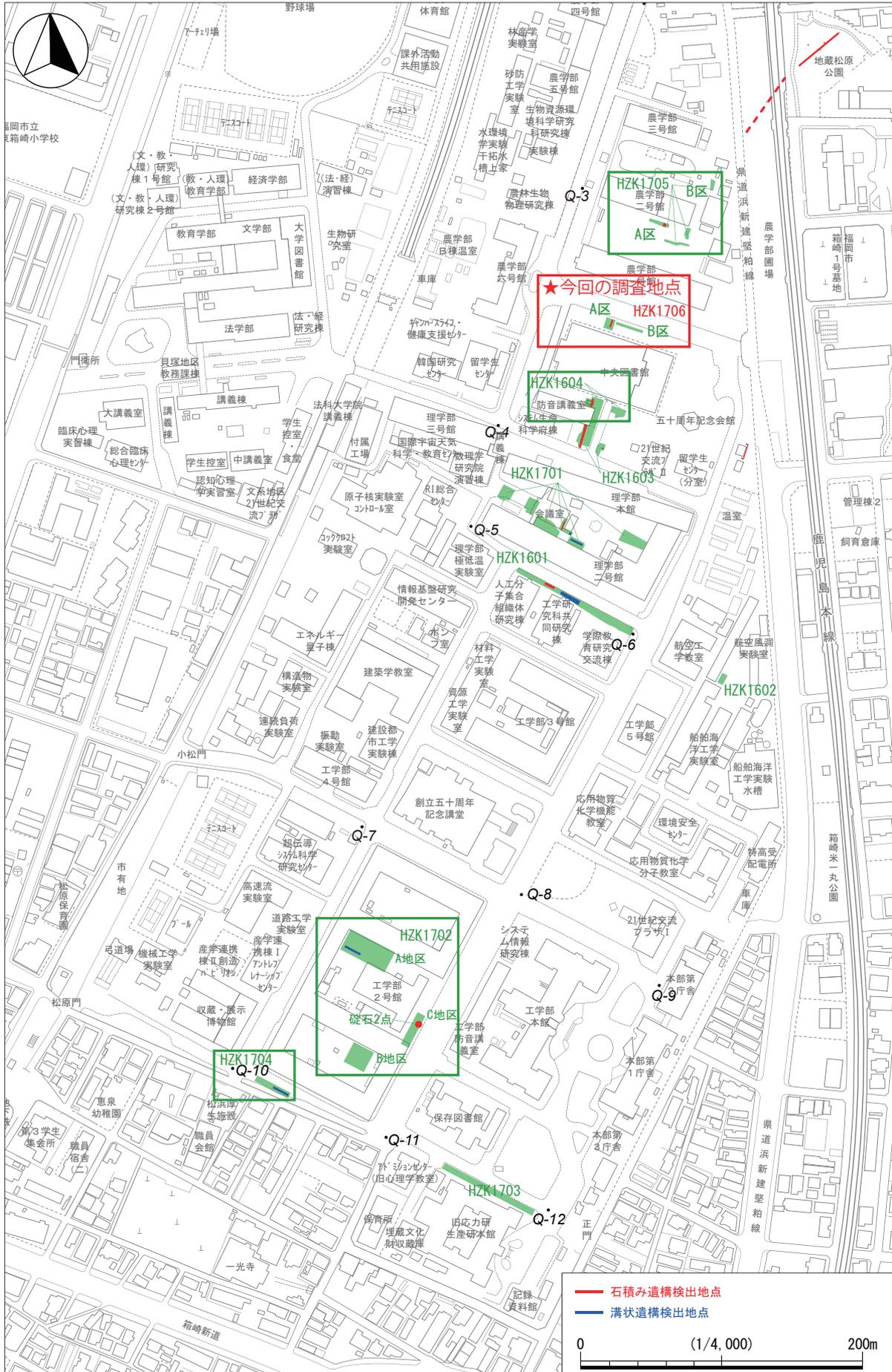
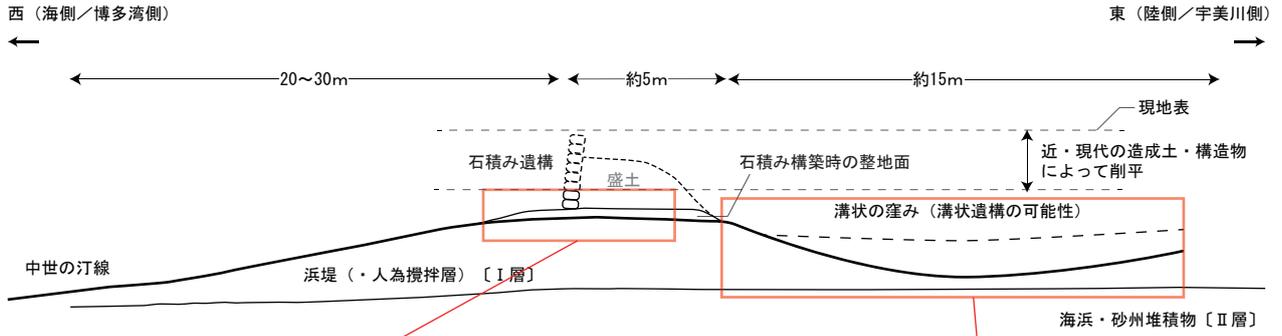


図4 箱崎遺跡とこれまでの調査地点



A区全景 (南から)



B区全景 (西から)

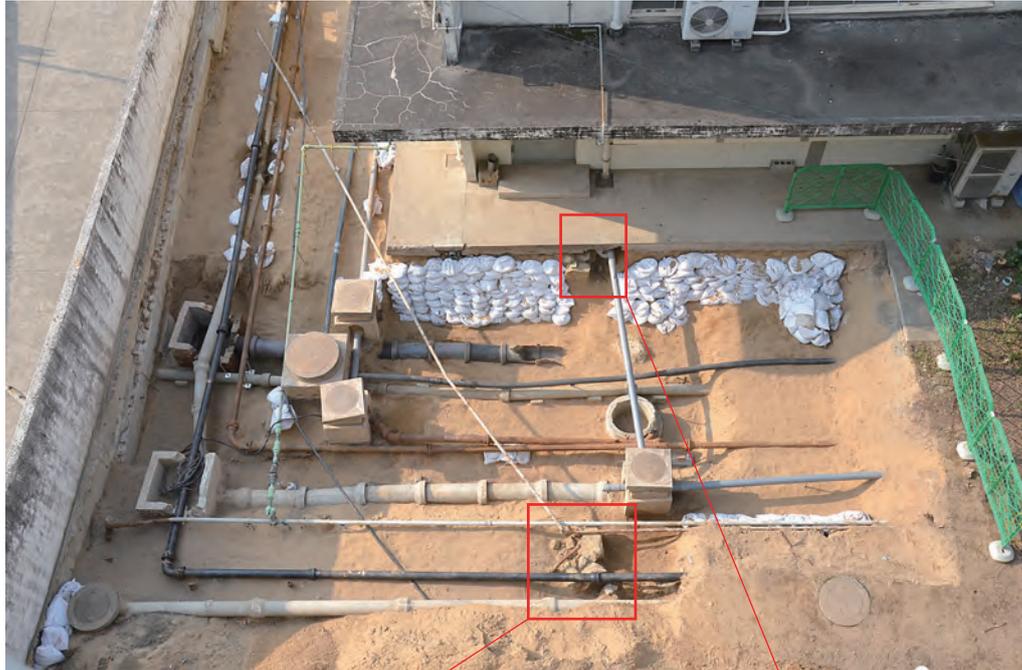


基底石と石材散布 (西から)



基底石 (西から)

図5 今回の調査地点 [中央図書館前北側地点 (HZK1706 地点)] の成果



西区全景（北東から）

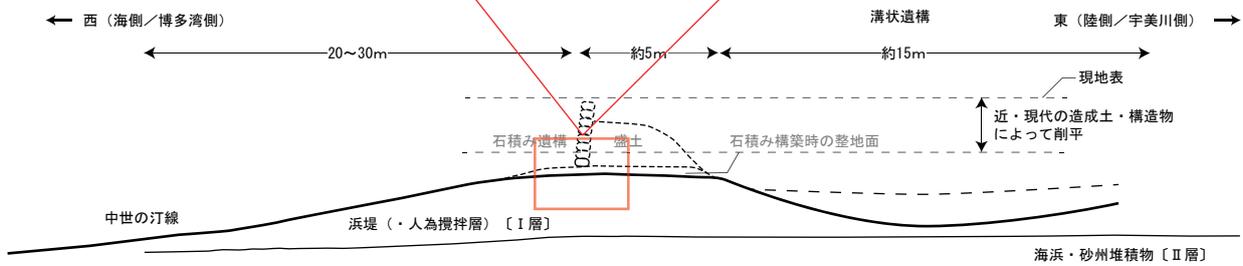
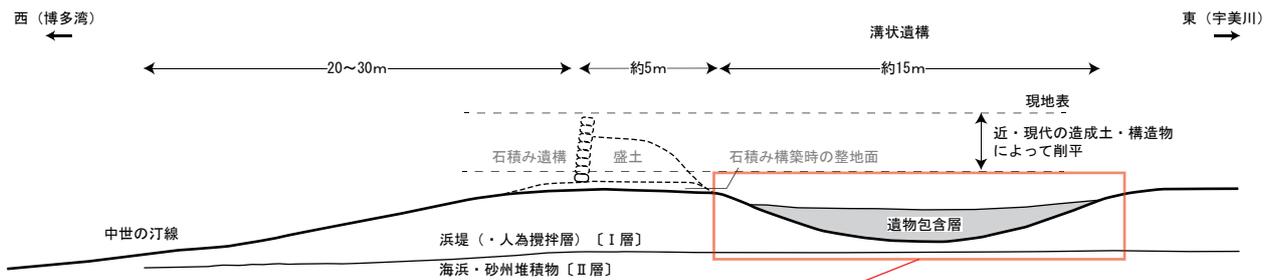


図6 中央図書館前南地点【2次】(HZK1604地点)の調査成果



A区での溝状遺構の検出状況 (北東から)



C区の近代攪乱坑から出土した礎石 (メジャーは約1m)

図7 旧工学部2号館地点 (HZK1702 地点) の調査成果



調査区全景（東から）

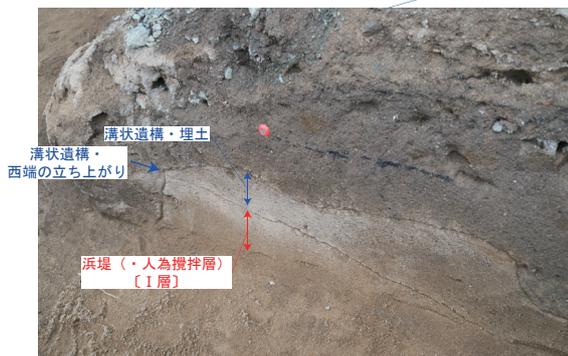
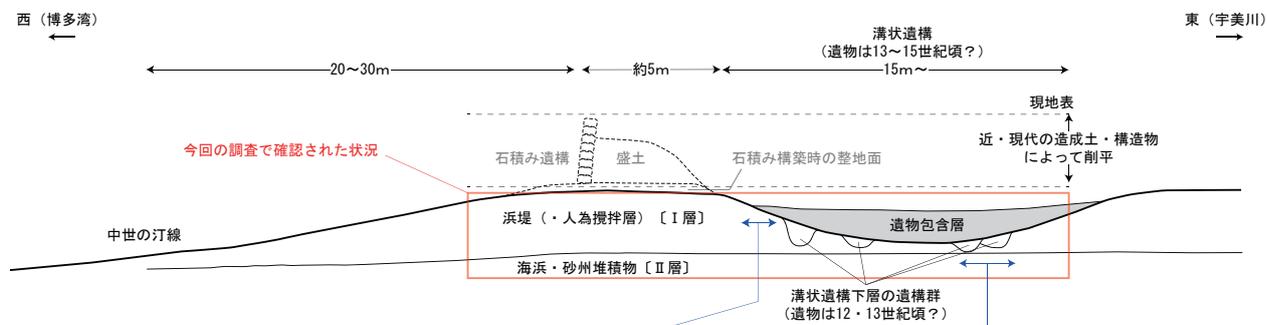
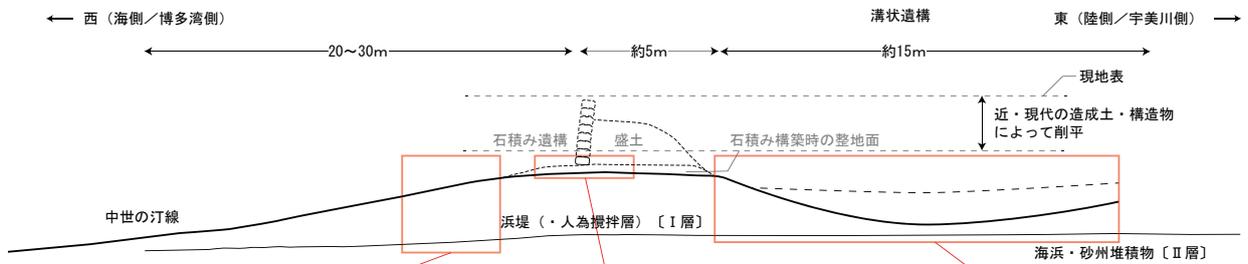


図8 旧工学部2号館前南地点（HZK1704地点）の調査成果



A 西区全景 (東から)



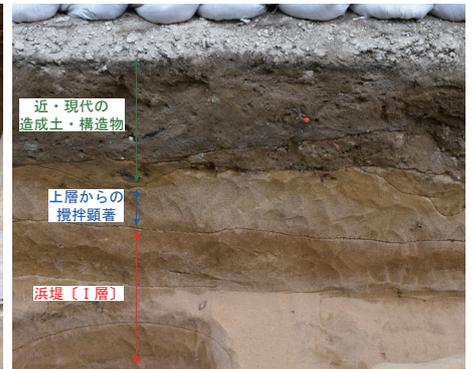
土層堆積状況 [A-西区] *



石片散布 (列状をなす部分) [A-西区] *



土層堆積状況 (溝状遺構は確認されない) [A-南区] *



* 模式図の方角にあわせ写真を反転させた。

図9 農学部2号館前南地点 (HZK1705 地点) の調査成果